

スパンサ・サパチャイさん

タイ日本語学校の現地責任者

スパンサ・サパチャイさん(34)が、城西病院の多田正毅正毅理事長やタイ王室のクンチャイ殿下と知り合ったのは、2005年の7月でした。「私は城西病院で生まれ変わりました」と語るように、2人との出会いが彼女の人生の岐路となりました。

もともとは、バンコク市内の私立病院で介護職員として働いていました。父親が村長だった影響もあり、政治家に興味をもって、仕事をしながら大学で政治学を学びました。そんな時、卒業した介護の学校から、「日本で研修しないか」という話があり、2005年の7月に来日。城西病院で研修中に多田理事長を知り、理事長を通じてクンチャイ殿下と出会いました。

日本での研修を終えてタイに帰国。2006年9月に多田理事長から日本国際親善厚生財団(JIFF)＝現在は茨城国際親善厚生財団(IIFF)＝の現地職員として要請され、メーサイ市に設けたメディカルトレーニングセンターで学ぶラオスやベトナム、タイ、ミャンマーの放射線技師や看護師、歯科医師、検査技師の世話や通訳をしてきました。

介護職から国際的な場に身を移したサパチャイさん。「人との出会いがとても楽しかった」と振り返ります。今は、2013年にメーサイ市に設立した「すばる日本語学校」の現地責任者として駆け回る日々です。

タイと日本の架け橋に



「大勢のタイ人が、日本語を学びたいと思っています。観光や仕事のために勉強したいと、多くの入学希望者がいます」と、日本語に対する関心の高さを語ります。サパチャイさん自身の日本に対する見方は「とても日本人は優しい。そして時間やルールに厳しい生活を送っている」と話します。そして「9年前に日本に来なければ、日本を知ることができなかった。日本とタイの架け橋としてがんばりたい」と抱負を話していました。

平成26年4月18日